Journal of Bunkyo Women's University
Vol.2, No.1, pp.39～53, 2000

トゥデーラのベンジャミンの旅書簡（２）

―ロードスからダマスカスまで―

関　根　謙　司*

Abstract

Benjamin of Tudela, a medieval Sephardic merchant, traveled all over the Mediterranean world including both Christian areas and Moslem ones. The twelveth century of his lifetime was not only the magnificent times where the international commerce would develop but also the intolerant times where one did not permit other religious. Especially in the Christian European world, the Crusade was organized against the Islamic world, the cathars, and also the Jews. Proceeding the Reconquista in the Christian Spain. Benjamin, born in Tudela after the success of Reconquista of Navarra, was visited many Jewish community from 1159 or 1160 to 1173.

He wrote many documents in Hebrew about many Jewish communities in many towns and cities where he was staying. Writng in Barcelona, Narbonne, Lunel, Marseille, Pisa, Lucca, Roma, Salerno, Taranto, Orie, Otranta, Thebes, Salunki, Cyprus, Antioch, Beirut, Tyre, Haifa, Nablus, Jerusalem, Askalon, Tiberias, Damascus, Aleppo, Baghdad, Sura, Pumbeditha, Khuzestan, EL-Cathif, Cairo, Gizeh, Alexandria, Messina, Palermo and Tudela, his documents changed a famous travel book titled *Sefer ha-Massa'ot*.

On my article (part 2) here, I translated and summarize his travel book into Japanese from Hebrew. And I tried to approach his living times, and to realize checking from other historical documents and studies. On the part 2 I treated the Moslem world, especially Palestine or Israelite land. Benjamin's travel documents is very similar with modern Jewish travel guidebooks, and I suppose it the first travel guidebook for Jewish troughout Jewish history.

Key Words: Benjamin of Tudela, Tudela, Medieval, Sephard, Sefer ha-Massa'ot, Hebrew, Cyprus, Armenia, Palestina, Jerusalem

---

Documental letters of Benjamin of Tudela (2) ―From Rhodus to Damascus―

＊Kenji Sekine

Correspondence Address: Faculty of Business Administration, Bunkyo Women's University, 1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533, Japan.

Accepted November 27, 2000.　　Published December 20, 2000.

5．ベンジャミンの見た十字軍時代のイスラム世界

ロードス島を後にしたトゥデーラのベニヤミンことベンジャミンは，当時，イスラム支配下のキプロス島に船出した。アラブ，トルコ，ギリシャと支配者を変えてきたキプロス島は，その軍事戦略的な地理状況とレバントこと東方アラブ世界の防衛線として価値あるところであった。ファマグスタはシェークスピアの『オセロ』（*Othello*）の舞台となったところで，良港としても有名である。山がちで農地として適さないキプロス島は商業では欠かせない基地として機能していた。

> （ロードス島を発って）４日してキプロスに着いた。そこにはラビ派のユダヤ教徒とカライ派のユダヤ教徒がいる。また，エピクルシンと呼ばれるユダヤ教徒もいる。彼らは，イスラエルの民【ユダヤ教徒のこと】があらゆる地で破門した人々である。彼らは，シャバトの夜の神聖を汚し，週の［最後の夜ではなく］最初の夜とみなしている。〔yod-zayn〕

ベンジャミンの旅行記の仏訳者である Haïm Harboun は，J. D. Eisenstein の研究[(1)]を引用して，当時のキプロス島にはエピクルシンはいないとし，シャバトの祭りを第７日の朝と考え，日曜日の朝までをシャバトとしたユダヤ教徒がいたとしている[(2)]。1158年，アブラハム・イブン・エズラはロンドンに向かう前にキプロス島に滞在し，『シャバトの書簡』（*Iggeret Shabat*）を書いている。この作品は，1739年に刊行されたカーロの『シュルハーン・アルーフ』（*Shulhān Arūkh*）で引用されて有名になったものである[(3)]。ベンジャミンの記述はアブラハム・イブン・エズラの記述に基づいているのではないかとベンジャミンの英訳者の Marcus　Nathan Adler は想定している[(4)]。

> キプロスから４日がかりでクリクスに向かった。そこはアルメニアと呼ばれる地にあり，タウロス王国と国境を接している。（タウロス王国は）山に囲まれていて，アルメニア王が支配している。アルメニア王は，トルニア地方やトルクメンのトガルミーム地方まで支配下においている。そこから，マルミストラスまでは２日の行程だ。そこは海に面したタルシーシュ（地方）にある。そこからはギリシャの王国が拡がっている。〔yod-ha〕

当時，アナトリア半島はビザンチンとアルメニアとトルクメンに分かれて王国が存在していたことをベンジャミンは伝えたかったのであろう。しかし，今まで記録してきたユダヤ社会の規模や指導者のラビ名は記していないところから見ると，ユダヤ教徒の行くべきところではな

かったのかもしれない。

そこから，フール川【オロント川のこと】に面したアンタキアまでは２日かかる。（フール川は）ヤボック川のことであり，レバノン山系やハマスの地から流れてくる。この町はアンタキア王が築いた大きな町で，城壁に囲まれている。山の頂上には泉がある。（その泉から）町の大きな20の家に上水道が引かれ，水が直接とどいている。町の別の面は川に囲まれている。とっても強固な町で，ボエモンド・ポイトヴェン・バウブ王によって支配されている。10人のユダヤ教徒が住み，ガラス作りに従事している。指導者は，ラビ・モルデカイ，ラビ・ハイム，ラビ・サムエルである。そこから，２日でレガに着く。（レガは）ラァディキヤとも呼ばれ，100人のユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・ハイムとラビ・ヨセフである。〔yod-zayn〕

実際のヤボック川はヨルダンにあり，アンタキアには流れていない。正確な記述が続くベンジャミンがなぜ間違ったのか，不思議なほどである。このことからも，ある町に滞在してそれまでの記録を書いていたため，記憶違いが起きたとも考えられるが，それにしてもこのようなミスが余りない分，不思議でもある。このことからも，ベンジャミンの記録が直接の体験からだけではなく，見聞や傍証に依っている部分もあるのではないかという疑問が生じてくるのである。(5)

1097年10月，第１回十字軍はアンタキアに到達した。指揮するノルマン人のホエモンドはオトラント王を称した。アンタキアの住民はギリシャ人やアルメニア人が多く，同胞のキリスト教徒を歓迎したが，シリア典礼教会に属する住民はムスリムの支配を望み，住民の意思は二分された。アンタキアは十字軍，ビザンチン，トルコが対峙するところとなった。1149年，アンタキア王でポアチエ伯レイモンはアレッポとエデッサの支配者であった，イスラム側のヌールッディーンを撲滅するためにイスマーイール派の暗殺教団（ハシーシュ教団）とも手を組もうとした。アンタキアは十字軍と東方キリスト教世界の争奪戦の場ともなった。1158年，エルサレム王のボールドウィンはビザンチンのマヌエル・コムネヌス皇帝の姪であるテオドーラ皇女と結婚することによって，十字軍とビザンチン軍はアンタキアを陥落させることができた。(6)

のちに『アンタキアの歌』（*La Chanson d'Antioche*）(7) として古代フランス語で書かれることになる激しい攻防戦の直後にベンジャミンはアンタキアに訪れている。

そこから，ゲバルまでは２日かかる。レバノン山系の麓にあり，バアル・ガドに由来する。近くにはハシーシュ教団が住んでいる。彼らはイスマーイール派の教義に従わず，彼らが預言者としてみなすカルマット派を信じている。〔yod-ha〕

ここでもベンジャミンはイスマーイール派とカルマット派を混同している。しかし，英語の

Assasin（暗殺者）の語源となったハシーシュ教団について少しばかり詳しい記述をしている。また，１年前にトリポリで地震があり，ユダヤ教徒も死亡し，住居が壊れたことも記している。

（トリポリから）もう１つのゲバルであるグバイルまで１日で行ける。ゲバル・ベン・アモンと呼ばれるところで150人のユダヤ教徒が住んでいる。ジェノヴァによって支配されている。（中略）200人ほどのユダヤ教徒が住み，ラビ・メイル，ラビ・ヤコブ，ラビ・シムハが指導者だ。イスラエルの地へは海沿いで行ける。〔yod-tav〕

そこから，ビールート【ベイルートのこと】までは２日の行程だ。そこには50人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・シュローモ，ラビ・オバディア，ラビ・ヨセフである。そこからサイダ【シドンのこと】までは１日だ。大きな町で20人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。そこから10ミリーン離れたところにサイダの人々と戦っている人々がいる。彼らはドルーズ教徒と呼ばれ，法規なし異教の輩だ。彼らは山岳地帯や絶壁に住んでいる。彼らには王はいないが，高い地位の人がいて普通の人と違っている。彼らはヘルモン山にまで拡がり，そこまでは３日の行程だ。彼らは信じられないことに，兄が妹と結婚したり，父が娘と結婚したりしている。彼らは，魂は肉体に残るものだと主張し，善良な人間の場合は生まれてくる子供に，悪い人間の場合は犬やろばに宿っているといっている。これを見ても，彼らは愚かな信仰の持ち主である。〔xaf〕

シーア派の１分派であるイスマーイール派から生まれたドルーズ派は，いまでも奇妙な習慣をもっていることで知られる。ファーティマ朝カリフであった，様々な奇行で知られたアル＝ハーキムを神格化したところから生まれたドルーズ派のことをベンジャミンは興味深く書いている。ベンジャミンは，多くの場合，自分が訪れた地のユダヤ社会について記録していることが大半で，不思議なことに旅行自慢もなければ，よくあるほら話もない。しかし，宗教の記述は詳細を極め，ここからもユダヤ教に対しての知識と自負心があったことが推察される。ベンジャミンは続ける。

彼らと混じって住むユダヤ教徒はいない。しかし，何人かのユダヤ教徒の職人や染色業者が交易のために彼らのもとにやってくる。住民はユダヤ教徒に友好的だ。彼らは山々や丘陵を彷徨し，彼らと戦う者はいない。〔xaf〕

サイダから半日でツェルプタ【サルファンドのこと】に着く。そこはサイダに沿ったところにある。そこから半日で新ティルスだ。そこは，中心部に港のあるとてもすばらしい町である。夜には，税の徴収人が塔から塔に鉄の鎖を投げる。船を盗んで小船や他の方法で逃亡することをできなくさせるためだ。どの世界を見ても，これほどの港はない。ティルスはすばらしい町だ。500人ほどのユダヤ教徒が住み，その中にはタルムードの学者もいる。ティルスのラビ・エファライムがダヤーン【ユダヤ社会の最高指導者】で，カルカ

ソンヌから来たラビ・メイールやユダヤ会議の議長であるラビ・アブラハムもいる。ユダヤ教徒は，壷を作ったり，ガラスを作ったりしていて，ティルスのガラスといえば，各地から絶賛されているものである。〔xaf〕

十字軍が侵入する1251年以前の繁栄したティルスの様子をベンジャミンは記述している。しかも，南フランスのカルカソンヌは当時，カタリ派の4姉妹といわれた牙城であり，カタリ地区とレバントのユダヤ教徒がかかわりをもっていたことが知られる。ガオンの権威がなくなった10世紀以降のユダヤ社会をとりまとめたユダヤ会議の議長もティルスにいたことに驚かされる。フェニキアが創ったティルスの当時の繁栄ぶりをベンジャミンは得意げに記述している。

十字軍がイスラム世界と接触したのは事実であったとしても，文化的には大きな交流はなかったというアナール派歴史学者は少なくない。十字軍以前から物資の流入はあり，十字軍が持ち帰ったものといえばあんずくらいしかないという意見まである。(8) これはイスラム研究者の見解とははなはだ異なるものである。(9) ベンジャミンの記述はそれよりも具体的で，ユダヤ社会では人の交流まであったことを伝えている。

そこから，1日でアッカに着く。アッカは古い町で，アセル【英語名でアッシャーのことで，ヤコブとジルバの息子で，イスラエル支族の1つとなる】の境にある。イスラエルの地が始まるところだ。大海【地中海のこと】に面し，船でエルサレムにやって来る巡礼団を迎える大きな港がある。町にカドウミーンの急流と呼ばれる洪水がおきている。200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・ツァドクとラビ・ヨナの息子のラビ・ヤファトである。そこからハイファまでは3パラサングだ。〔xaf-alef〕

現在パレスチナとも呼ばれる，イスラエルの地に入ってからはベンジャミンの記述は詳細を極め，勢いのある文章となっている。この場合のイスラエルの地とは『旧約聖書』で伝えられたイスラエル王国とその12支族の地としてであって，もちろん現在の国名と関係はない。のちにアッカの戦いで第3回十字軍とサラディーン軍が激しく戦う町の様子をベンジャミンは伝えている。

（ハイファから）カペルナウムまでは4パラサングである。そこはナフーム地方の村であり，マオンとも呼ばれ，カルメルのナバルの家があったところである。〔xaf-alef〕

ベンジャミンの仏訳者のHaïm Harbounは，ベンジャミンが『旧約聖書』の「サムエル記」（25：2）の記述からカルマルとナバルを混同しているが，最初のカルマルはユダの部族の境に住み（「ヨシュア記」，15：55），次のカルメルはハイファにあるカルメル山のことであると注記している。(10)

ここから，カエセレアことフィリスティーン地方のガットまでは６パラサングだ。200人ほどのユダヤ教徒と200人ほどのクートの人々が住んでいる。クートの人々とはショムロン【サマリアのこと】から来たユダヤ教徒で，サマリア人のことである。町は活気があり，美しい。海に面している。カエサルによって建設された町のため，カエセレアと呼ばれるようになった。ここから半日でカイラの建物群と呼ばれるカーコーに着く。そこにはユダヤ教徒は１人もいない。そこから半日でサルグルノー【聖ジョルジュのこと】だ。ルッドとも呼ばれ，皮なめし業のユダヤ教徒が１人，住んでいる。ショムロンの町であるセバスティーヤまでは１日の行程だ。オムリーの息子アハブの宮殿といわれる廃墟が残っている。（中略）そこからナブルスまでは２パラサングだ。〔xax-alef～xaf-ba〕

『旧約聖書』に通暁するベンジャミンは，サマリアからナブルスのことを詳しく記述している。ユダヤ教徒はいないが，1000人のクートの人々が住んでいること。モーセの律法を守っているために，サマリア人と呼ばれることを記している。ナブルスは第１回十字軍の時代にイスラム軍の基地となったことでも知られる。エルサレムからナブルスに逃れたイスラム教徒も少なくない。それにしても，「イスラエル」の地は他の地域と異なり，詳細を極め，熱心に記述している。英訳者の Marucus N. Adler は，ベンジャミンは彼が記録したすべての場所を訪れたわけではないだろうと指摘しているのもこうした記述の偏りが原因している。[11] また，カエセレアはローマの植民都市で，十字軍の基地として機能していたことでも知られる。[12]

（ナブルスから）ギルボア山まで４パラサングの距離である。ギルボア山とはキリスト教徒の呼称だ。とても乾燥した地域だ。そこから５パラサングのところにある村があって，ユダヤ教徒が１人も住んでいない。アジャロン渓谷へはそこから２パラサングで，そこはキリスト教徒がヴァル・デ・ルナ【月の谷】と呼んでいるところだ。そこから，１パラサングのところにマホール・マリアというところがある。そこが大ギブオーン【ギボンの泉のある場所のこと】で，ユダヤ教徒は１人もいない。〔xaf-gimel〕

そこから，エルサレムまでは３パラサングだ。小さな町で３つの壁で城壁になっている。イスラム教徒だけではなく，ヤコブ派【アルメニア教会のこと】，シリア典礼教会，ギリシャ正教，カトリックなど多くの人々で満たされ，ごちゃ混ぜのフランク語が話されている。死体安置所があって，ユダヤ教徒は毎年，王【ラテン王国を築いた十字軍の王。1162年に Balwin 3 世は亡くなっているので，当時はその弟の Almaric 王】に少額の使用料を払っている。ユダヤ教徒といっしょに他の宗教の信者が安置されることはエルサレムでは許されていない。町の片隅にあるダヴィデの丘の上に200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。（中略）

エルサレムには４つの門がある。アブラハム門，ダヴィデ門，シオン門，ヨサファト門の４つである。ヨサファト門は古代の神殿に面しており，いまは主の神殿と呼ばれている。

〔xaf-gimel〕

当時，エルサレムは十字軍の支配下にあり，ベンジャミンはイスラム教支配地区とキリスト教支配地区を自由に行き来していたかのように記述している。２つの対立する宗教圏の双方に居住区をもつユダヤ教徒が双方の地区に自由に行き来できたことをベンジャミンの記述は裏付けているともいえる。エルサレムの４つの門[13]もキリスト教徒である十字軍の騎士たちが呼称していたものである。現在も神殿の丘にそびえ立つ岩のドームのことにもベンジャミンは触れている。嘆きの壁ともいわれる西の壁に近いことがよほど気がかりだったのであろう。神殿の丘はかつてダヴィデの第２神殿があっただけに留まらない。モーセが神から使わされた十戒が収められたアーク（聖杯）が埋められたところと信じられている。[14]

聖地の上に，ウマル・イブン・アル＝ハッターブは，巨大で壮麗な天井のある建物【モスクのこと】を建てたが，ここには絵画も偶像もない。また，礼拝に訪れる人もわずかである。この建物の前に西の壁がある。それは聖なるものの中でも聖なる壁の１つである。ここは慈愛の門とも呼ばれており，ユダヤ教徒なら誰でも神殿の庭の壁に来る前にわざわざここに来て祈りを捧げる。〔xaf-dalet〕

コンスタンティノープルと並び，エルサレムの記述も詳細にわたっている。ベンジャミンの記述は，入手できた情報量に比例するかのように，ユダヤ教徒の人口比率が高まれば詳しくなる傾向があるが，ことエルサレムについてはそうとばかりいえない。[15]オリーブ山のこと，シオン山のこと，死海のこと，聖地に対する思いは人一倍だったようだ。それよりも，コンスタンティノープルと同様，エルサレムの滞在が長かったことを示唆しているといってもいい。

（エルサレムから）ベツレヘムまでは２パラサングだ。そこはキリスト教徒がレオンの家と呼んでいるところで，そのすぐそば，半ミリーンの距離のところにラケルの墓の柱がある。ここは，ヤコブの子供の数に従って11個の石で作られている。（中略）ベツレヘムにはユダヤ教徒の皮なめし業者が２人住んでいる。そこは多くの水路があり，井戸や泉がたくさんある。〔xaf-vav〕

ベツレヘムの描写はいたってあっさりしている。ベンジャミンは十字軍の時代に，ユダヤ教徒であればこそ，イスラム世界とキリスト教世界を行き来できたわけだが，それにしてもこの記述のムラには疑問が残るのも事実である。彼の記録は体験に由来するものと見聞に依拠するものとがあって，その判断をする必要がありそうだ。事実，イスラム世界に入ってから，ユダヤ教徒の数を始め，博覧強記のベンジャミンにしては，誤認や誤記が目立つ。

そこから６パラサングで聖アブハム・デ・ブロンことヘブロンだ。山間の古い町だが，いまは廃墟となっている。マフファラ平野のそばの谷あいに現在の町がある。聖アブハムと呼ばれる大きな教会があり，イスラムの支配時代はユダヤの軍基地があったところだ。高貴な人々【十字軍の騎士たち】がここに６つの墓を建てた。アブラハム，サラ，イツハク，レベッカ，ヤコブ，それとレアの墓である。墓守は巡礼者がやって来ると，ここは先祖の墓だからと教え，巡礼者に金銭をせがむのである。しかし，もしユダヤ教徒が来ると，墓守は先祖の造った鉄の扉を開けて，手に蠟燭をもって階段を降りる。墓に着くと，何もない。１つ目の墓の中は空である。しかし，３つ目の墓の下にはアブラハム，イツハク，ヤコブ，それと向き合ってサラ，レベッカ，レアの石像がある。〔xaf-vav～xaf-zayn〕

ベンジャミンは墓石にそれぞれ誰の墓か刻まれていることを記録している。いまでも大差ないまやかしとごまかしがこの時代からあったと思うと，不思議な気持ちに誘われる。ベンジャミンはこの墓はイスラエルの先祖の遺骨を運んできて造ったものだと疑わない。

（ヘブロンから）ベート・ギブリーンまで５パラサングだ。そこはマレシャと呼ばれ，３人のユダヤ教徒しか住んでいない。そこから，３パラサングで聖サムエル・デ・シーロだ。シーロはエルサレムからは２パラサングの距離にある。キリスト教徒がラムラを包囲したとき，彼らはシナゴーグのそばでラムラのサムエルの墓を見つけた。彼らはそこに大きな教会を建て，それをシーロの聖サムエル教会と呼び，今日【ベンジャミンの時代】に至っている。〔xaf-het〕

十字軍の支配下にあるパレスチナの地（ユダヤ教徒の言葉に従えばイスラエルの民の地）の状況をキリスト教徒の立場からでもなく，イスラム教徒の立場でもなく記録したベンジャミンの記述には興味深いものがある。[16]『アンタキアの歌』[17]にしても，あるいはイブン・アル＝アスィールの『完史』にしても，[18]また十字軍と戦ったウサーマ・イブン・ムンキズの『自伝』にしても，[19]共通していることは戦いに関与した年代記作家あるいは当事者の記録であることに変わりはなく，政治的な色彩の濃い記述になっていることが多い。彼らの記録は，当事者であればこそ知りえる貴重なものが少なくない一方，一般の人々の意識とはかけ離れていることも事実である。十字軍とイスラム軍が激しく戦っていたとき，農民はやはり田畑に出向いて農作業をしていたに違いない。アナール派ではないが，そこが見えない部分なのである。ベンジャミンの記録は，意外に十字軍時代であっても人々は荒廃した中でものんびりと生活していたことを伝えてくれる。

ベンジャミンの記録は，当事者でないがゆえに，非常に淡々と自分が体験した，あるいは見聞した日常の生活を記述している。ほとんど自分が出ることもなく，旅行書としての記述に留まっている。事実，ベンジャミンの記録は不思議なほど，現代のユダヤの旅行ガイドブックに

酷似している[20]。ユダヤ教徒が寝泊りできるホテル，出入りできるコーシェルが厳守されたレストラン，ラビへの連絡先，不思議なほどにそっくりなのである。いいかえれば，ベンジャミンはその後に続くユダヤの旅行書の先駆的な著述を行ったともいえるが，またそれがユダヤ教徒にとってはもっとも求められていたものだともいえる。特定の国家をもたず，商人として活動し，各地に点在するユダヤ社会を行き来し，その地の情勢を伝えることが，メシアの到来まで必要なことであった。

（シーロから）３パラサングで小マルマリアで，そこはサウルのギブアとも呼ばれている。ユダヤ教徒は１人もいない。ここはベニヤミンのギビアとも呼ばれている。そこから３パラサングでベイト・ヌーバに着く。ヌーバは司祭たちの町である。道の真中に，ヨナサンの２つの岩がある。１つはボゼズの名が，もう１つはセネの名が刻まれている。２人のユダヤ教徒の皮なめし業者が住んでいる。

そこからラムラまでは３パラサングだ。そこは先祖の時代からの城壁が残っていて，そのことは石に刻まれている。300人ほどのユダヤ教徒がそこに住んでいる。かつては大きな町であった。２マイル離れたところに，大きなユダヤ教徒の墓地がある。〔xaf-het〕

実際のラムラは聖書の時代には存在していなかった。ラムラは716年に建設され，エルサレムにひけをとらない位の規模の町になったが，1033年，地震で大打撃を受けている。ラムラはイスラム教徒の町であったが，十字軍が進攻した後，ユダヤ教徒で留まったものもいた。当時ラムラの人口の大半は十字軍のキリスト教徒であったと想定される。

そこから５パラサングでナフー【ヤッファのこと】に着く。そこは海に面した町で，１人のユダヤ教徒の皮なめし業者が住んでいる。そこから５パラサングでヤブナに行ける。ユダヤ学校のあったところだが，いまは１人のユダヤ教徒も住んでいない。ここからは，エフライム地方となる。〔xaf-het〕

十字軍がパレスチナの地を荒廃させていたことはベンジャミンの記録からも窺い知ることができる。エルサレムを含む周辺の町を去ったユダヤ教徒が少なくなかったことが想定できるともいえる。ベンジャミンは荒廃したパレスチナの地，イスラエルの民の地をくまなく訪れている。各地に移り住んだユダヤ教徒に情報を知らせる必要があったのかと思われるほど，こまめに回っている。それにしても，１人とか２人とか残ったユダヤ教徒の大半が皮なめし業者であったことは興味深い。ユダヤの伝統工芸であったというだけではなく，十字軍の騎士たちが彼らを必要としていたと想定される。ヨーロッパでは，十字軍を契機にユダヤ十字軍が組織されつつある時代であり，キリスト教徒のユダヤ観は決して友好的なものではなかったはずだ。だからこそ，ジンミーとして生きる生活の権利を与えられたイスラム世界に住むことを好んだユ

ダヤ教徒が少なくなかった。ラビのいない地区に住むユダヤ教徒を必要としていたのは，しかし十字軍の騎士たちだけではなかったとも想像される。万一にそなえて，情報網を完備させるのがユダヤ社会の常である。少数のユダヤ教徒はいわば連絡基地の役割をになっていたと考えることができる。

（ヤッファから）５パラサングでパルミドだ。そこはフィラスティンのアシュドドともいえるところだ。いまは廃墟になっている。ユダヤ教徒は１人もいない。そこから，２パラサングでアスケロンに着く。そこは新アスケロンで，エズラが海のそばに建てた町だ。もとはベネ・ベラクと呼ばれていた。古代の廃墟となっている町アスケロンから４パラサング離れている。新アスケロンは大きく，きれいな町だ。商人があちこちからやって来ている。エジプトから来る商人もいる。200人ほどのラビ派のユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・ゼマフ，ラビ・アーロン，ラビ・ソロモンだ。40人ほどのカライ派のユダヤ教徒と300人ほどのクト人もいる。（中略）そこから，ルッドの聖ジョルジュまでは１日の行程だ。そこから，ゼリンことイェズリアルまで半日で行ける。そこは大きな泉のあるところで，ユダヤ教徒の皮なめし業者が１人住んでいる。そこから３パラサングでセフリヤに着く。〔xaf-het～xaf-tet〕

十字軍によって荒廃された地をベンジャミンは淡々と描いている。それにしても，ベンジャミンの旅行を可能にさせた原動力は何だったのだろうか？　憧れの聖地とその周辺の荒廃ぶりを描くために来たのではないのは明らかである。当地を描くとき，ベンジャミンのヘブライ語は不思議に悲しい文体とトーンを再現してくれる。

そこから，ヨルダン川に面したティベリアスまで５パラサングだ。ヨルダン川は２つの山あいの谷に沿って流れている。（中略）ティミンことティムナタまでは２日の行程だ。そこは聖シモンや多くのイスラエルの民が埋葬されているところだ。そこから３パラサングでメドンことメロンに着く。その近くに洞穴があって，ヒルレルとシャンマイの像が収められている。（中略）そこからアルマまでは２パラサングだ。50人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。大きなユダヤ教徒の墓地もある。（中略）そこからカデスまでは半日の行程だ。（中略）ここにはユダヤ教徒は１人も住んでいない。そこからバニアスまでは１日かかる。〔xaf-tet～lamed〕

シリアに近づくにつれ，イタリアやギリシャのときのような淡々とした記録に戻る。ダマスカスまではあと２日だ。

【資料】 ベンジャミンの記述によるユダヤ教徒の人口分布

参考資料：Haïm Harboun, *Les Voyageurs juifs du XIIe siècle-Benjamin de Tudèle,* Aix-en-Provence, 1986, pp. 70-73

注：ベンジャミンによる数字は Adler 本の個人数を明記し，Grünhut 本の家族数と一致しなかった場合のみ相違欄に注記した。このことからも個人数＝家族数であったと思われる。

地域名	都　市　名	ベンジャミンによる記述	相　違	備　考
フランス	ナルボンヌ	300		
	リュネル	300		
	ボケール	40		
	サン＝ジール	100		
	アルル	200		
	マルセイユ	300		
イタリア	ジェノヴァ	2		
	ピサ	20		
	ルッカ	40		
	ローマ	200		
	カプア	300		
	ナポリ	500		
	サレルノ	600		
	アマルフィ	20		
	ベネヴェント	200		
	メフフィ	200		
	アスコリ	40		
	トラニ	200		
	ターラント	300		
	ブリンディシ	10		
	オトラント	500		
	メッシーナ	200		
	パレルモ	1500		
ギリシャ・トルコ	コルフ	1		
	レウカード（アルタ）	100		
	アケロス	30	10	
	パトラス	50		
	レパント	100		
	クリサ	200		
	コリント	300		
	テーベ	3000		
	ネグロポンテ	200		
	ヤブストリッサ	100		
	ラビニカ	100		
	ラミア	50		
	アルミロス	400		
	ヴィセナ	100		
	サロニカ	500		

	デメトリサ	50		
	ドラマ	140		
	クリストポーリ	20	20	
	コンスタンティノープル	2000		
	ロドスタ	400		
	キリア	50		他にカライ派500
	ガリポリ	200		
	キオス島	400		
	サモス島	300		
	ロードス島	400		
シリア・パレスチナ	アンタキア	10	200	
	ラオディカ	100		
	ゲビレット	150		
	ベイルート	50	400	
	サイダ（シドン）	20		
	ティルス	500		
	アッカ	200		
	カエサレア	200	10	他にサマリア人200
	リッダ	1		
	エルサレム	200		
	ベツレヘム	2	4	
	ジブーン	3	12	
	ノビ	2		
	ラムラ	300		
	ヤッファ	1		
	アスカロン	200		
	セライン	1		
	ティベリアド	50		他にサマリア人300
	グシュ	—		
	スリマ	50		
	ダマスカス	3000	20	
	ギレアド	60		
	タドモール（パルミラ）	2000		Petahia は19000
	キリアテン	1		
	アイムス	20		
	ハマ	70		
	アレッポ	5000		
	バリス	10		
メソポタミア	カラートジャバル	2000		
	ハッラーン	20		
	ラッカ	700		
	ラースアルアイン	200		
	ニシビス	—	1000	
	ウマル島	4000		
	モスル	7000		

	ラッバーフ	2000		
	カルキシーヤ	500		
	ハダーラ	15000		
	オブカラ	10000		
	バグダード	40000		
	レセン	5000	1000	Petahia は1000
	バビロン	3000		
	ヒッラ	10000	20000	
	カフリ	200		
	コトソナス	300		
	エルアンラル	3000		
	バスラ	10000	2000	
アラビア半島	ティルモス（テイマ）	100000		
	ヘイタル	0	50000	
	タハイ・サヌア	0	300000	
	ルシス	3000		
ペルシャ	サマーラ	1500		
	スーサ	7000		
	ルドバル	20000		
	ネハーワンド	4000		
	アマディア	25000		
	ハマダーン	30000		
	タハリスターン	4000		
	ファルス（シーラーズ）	10000		
	ガズナ	80000		
	イスファハーン	15000	8000	
	サマルカンド	50000		
アラビア湾岸	キシュ	500		
	カティフ	5000		
インド洋沿岸	イブリーグ	3000	23000	
	キボン	0	100000	
	アルギンガレーフ	1000		
ナイル沿岸	ヘルワン	300		
	クース	300	30000	
	ファイユーム	200	20	
	フスタート（カイロ）	7000		
	ビバイス	300	3000	
	アルブビジグ	200		
	ベンハ	60		
	マナフスフタ	500		
	サマウ	200		
	ダミサ	700		
	ランマナ	500		
	アレキサンドリア	3000		

	ダネルト シマシン タリス	200 100 40		
ボヘミア	プラハ	—	106	

（注）

（1） J. D. Eisenstein, *Otsar Massaoth Itinéraires by Jewish Travelers,* Tel Aviv, 1969

（2） Haïm Harboun, *Les Voyageurs juifs du XIIe siècle-Benjamin de Tudela,* Aix-en-Provence, 1998

（3） *Encyclopaedia of Judaica, Jerusalem,* 1972, vol. 8, p. 1164

（4） Joseph Simon, *The Itineray of Benjamin of Tudela,* Malibu, 3rd＝1993, p. 75

（5） 近年，中世の旅行家として知られるマルコ＝ポーロやイブン・バットゥータの中国滞在に疑問を投じる学者もいないわけではない。

（6） Sandra Benjamin, *The World of Benjamin of Tudela-A Medieval Mediterranean Travelogue,* Cranbury/London, 1995, pp. 145-6

（7） *Croisades et Pélerinages,* Paris, 1997はその現代フランス語訳である。

（8） 新倉俊一『中世を旅する―奇蹟と愛と死と』，白水社，1999年，23頁

（9） 2000年3月，筆者は十字軍が持ち帰ったイスラム軍の旗が残されているという南フランス・アプトの教会の宝物殿を訪れることができた。そのとき，イタリア人の学者と驚嘆して見ることができたのは，聖アンヌの遺骨を包んだといわれるコーランの字句が刻まれた聖衣であった。クーフィー体のアラビア語の書体で，ダミエッタで織られたものであった。明らかに十字軍の騎士がイスラム商人と交易していたことを示唆するものであり，その物証を得た興奮を抑えながら，アヴィニョンに戻った。前日，ベンジャミンも訪れたボケールの町で見たイスラム支配下のマラーガからもたらされた陶器にはユダヤの紋章があり，南フランスこそはアンダルシアとレバントを結びつける地域であったのではないかと想定した。これについては，さらに物証ならびに文献的裏付けが必要であると思われるが，その橋渡しをしたのがユダヤ教徒である可能性は高く，イスラム世界と西欧世界の要にユダヤ教徒の存在が見え隠れするのである。

(10) Haïm Harboun, *op. cit.,* p. 213

(11) Joseph Simon, *op. cit.,* p. 82

(12) 当時のカエサレアの想像図は，Jonathan Riley-Smith, *Atlas des Croisades,* Paris, 1990, pp. 38-39に厳密に描かれている。

(13) 現在は8つの門がある。これはオスマン帝国の支配時代にスレイマーン1世が改築したためで，これが最後の改築となり，現在に至っている。

(14) アークをめぐる伝説は後を絶たない。ハリウッド映画『インディジョーンズ』(Indy Jones) にもこれをモチーフとしたものがあるほどである。アークは十字軍時代にこの地に来たテンプル騎士団によって掘り出され，それを購入したエチオピア教会は，いまもエチオピア教会が所有していると主張しており，専従の番人を世襲制で置いているほどである。実際に見た者がいないという意味では，謎のアークであり，キリスト教徒とユダヤ教徒の熱い思いが様々な伝説を生んでいる。

(15) ローマの写本ではdalet（ד）になっており，これは写字生がresh（ר）と間違えたものとされる。いわゆるアラビア数字が使用される近世以前，ヘブライ語ではヘブライ文字で数字を代用した。daletは4であり，reshは200である。そのため，エルサレムのユダヤ教徒の数を4では不自然なので，200とみなしてきたが，1175年にエルサレムに訪れたラビ・ペタヒア（Rabi Petahia von Regensburg）は町には1人しかユダヤ教徒はいないと記している。

(16) 詳しくは，John France & William G. Zajac ed., *The Crusades and their Sources,* Aldershot, 1998, Francesco Gabrieli, *Storia arabi delle Crociata,* Turin, 1963, Viviana Pâques tr., *Chnroniques arabes des Croisades,* Paris, 1996を参照のこと。

(17) 注（6）を参照のこと。

(18) Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta'rīkh* のこと。イスラム史の通史であるだけではなく，十字軍の記述では1級史料となっている。

(19) cf. André Miquel, *Ousama-Un prince syrien face aux croisés,* Paris, 1986

(20) たとえば，*Jewish Travel Guide,* London, 1953, *Le Guide juif du Voyage,* Geneve, 1994